

東京・春・音楽祭 2021

シューベルトの室内楽～ミハル・カニユカ (チェロ) & 関西弦楽四重奏団



曲目解説

シューベルト：弦楽四重奏曲 第12番 《四重奏断章》

第1楽章のみが完成された弦楽四重奏曲第12番《四重奏断章》は1820年の作品とされ、五重奏曲《ます》などと同時期に書かれた。当時シューベルトは、家庭音楽会や友人との内輪の発表会のために作曲した室内楽を公にし、器楽作曲家としての地位を確立しようと形式面の強化に努めていた。アレグロ・アッサイの第1楽章は、後期の弦楽四重奏曲を予感させる、ダイナミックなソナタ楽章の様式を獲得している。

シューベルト (M.カニユカ編)：アルペジオーネ・ソナタ (ソロ・チェロ&弦楽四重奏版)

ウィーンの楽器製作者シュタウファーが1823年に発案した「アルペジオーネ」というフレット付きの弦楽器は、いわばチェロのように弾くギターだったが、普及には至らなかった。本作は、そのアルペジオーネのために書かれたものとしてはおそらく現存する唯一の楽曲。今日、ヴィオラ、チェロ、ギターなど様々な楽器で奏でられる。音楽的にはシューベルトならではの哀愁が存分に感じられ、広く愛聴されている。

シューベルト：弦楽五重奏曲

1828年夏に作曲されたシューベルト唯一の弦楽五重奏曲で、同年11月の作曲者の死により最後の室内楽曲となった。モーツァルトの弦楽五重奏曲とは異なる、ヴァイオリン2、ヴィオラ1、チェロ2という編成を採用し、低音域の充実が図られている。シューベルトならではの謹直な音楽性とロマンティックな気分が交錯する本曲は、若々しい感性に満ち、作品に対する並々ならぬ意欲が感じられる。

長大な第1楽章アレグロ・マ・ノン・トロポはソナタ形式。美しい抒情を帯びた主題と、緊張を高める鋭い主題とがドラマティックな和声とともに進行する。三部形式による第2楽章アダージョは、ホ長調の息の長い旋律が繰り返されたのち、中間部で突如、ヘ短調の慟哭するような旋律が現れて転調するが、再び平穏を取り戻す。第3楽章スケルツォは、力強くバイタリティあふれるプレストの主部と、アンダンテ・ソステヌートの緩やかで内省的なトリオとの対比が

印象的。第4楽章アレグレットは、自由なロンド・ソナタ形式による華やかなフィナーレ。舞曲的な性格を強く感じさせる2つの主題が交互に現れ、コーダでは次第にテンポを増し、エネルギッシュに曲を閉じる。